

---

# 遊戯王GX～亡霊を従えし者～

翔

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

遊戯王GX〜亡霊を従えし者〜

### 【Nコード】

N4899BA

### 【作者名】

翔

### 【あらすじ】

遊戯王GXの世界にアンデット使いで少々訳ありのオリキャラがいたら？という妄想です。

タッグフォースキャラも出す予定です。

この物語にはチートドロ〜、ご都合主義、原作キャラとの恋愛要素が含まれています。苦手な方はご注意ください。

## 第一話 入学試験（前書き）

妄想を消化するための二次創作です。

## 第一話 入学試験

「ここが、デュエルアカデミアへの試験場か……」

ようやくこの場に立つことが出来る。

感極まって泣いてしまいそうだ。

まあ、泣かないけど。

俺は変わったんだ。

さてと、こんなところで油売ってないでさっさと受付に行くか。

「受験番号120の鳴海遊希です」

「受付時間ギリギリじゃないか。一体どうしたんだい？」

「電車の事故で遅くなりました」

「きみもか。もう一人、遅れてやってきた子がいてね。今は試験デュエルの真っ最中だよ。きみも早く行くといい」

「ありがとうございます」

グッド。

試験官は比較的やさしそうで良かった。

意気揚々と試験会場に入ってみる。

「食らえ、スカイスクレーパーシュート！」

「おお、やってるやってる」

一人しかデュエルをしてないってことは、あいつが俺の前にやってきた奴か。

「……ヒーローか」

「あれ？ きみも受験生？」

俺の呟きで気づいたのか、メガネをかけた受験生らしい奴が話しかけてくる。

無視するのも面倒だし、会話をしてみることにする。

「ああ、俺は鳴海遊希。受験番号120番だ」

「僕は丸藤翔。受験番号は119番だよ」

筆記は時の運だからな。

負けてもしようがない。

「受験番号120番。鳴海遊希くん」

「あ、俺の番だ」

ちょうどいいタイミングで俺はデュエルフィールドに向かう。

その途中、さっきまでデュエルしていた受験生とすれ違う。

「頑張れよ」

「あ、ああ」

ポンツと俺の肩を叩いて、その受験生は階段を上がっていった。

少々馴れ馴れしいが、悪いやつではなさそうだ。

デュエルフィールドに着くと、さっきの受験生と戦っていた試験官がいた。

「受験番号120。鳴海遊希です」

「シニョール遊希。私はクロノス・デ・メディチ。学校では実技担当最高責任者をやってルーノです」

なん、だと……。

俺の試験の相手が実技の最高責任者？

ちょっと待ってくれ、実技最高責任者が受験生に負けるとかあっていいのか？

「何を考えてるノーです？」

「い、いえ、何でもありません」

そうだ。

きつと油断していたに違いない。

「では、早速始めルーノです」

「『デュエル！』」

クロノスLP4000

遊希LP4000

「先攻はもうルーノです」

大人気ない。

まあ、俺の手札的には……ってちょっと待て、これってワンキル狙えるんじゃないか？

「さつきから何を考えているかはしりませんが、私はフィールド魔法『歯車街』を発動。さらにカードを二枚伏せて『大嵐』を発動するノーネ！」

この展開は後攻のときにやるべきだろ。

「破壊された『黄金の邪心像』と歯車街の効果で邪神トークン二体とデッキから『古代の機械巨竜』を特殊召喚するノーネ」

邪神トークンATK1000×2

古代の機械巨竜 ATK 3000

何故か、外野からは終わったな、とか残念だったわね、とか聞こえてくるが気にしない。

気にしたら負けだと思う。

実際に終わったのは先生だと思うけど。

「さらに、邪神トークン二体を生贄に捧げて『古代の機械巨人』を召喚するノーネ」

古代の機械巨人 ATK 3000

この上なく、先生の顔がエリート面してる。

何だかイライラしてきた。

「私はカードを一枚伏せてターンを終了するノーネ」

クロノス LP 4000

古代の機械巨竜 ATK 3000

古代の機械巨人 ATK 3000

魔法・罠カード

一枚

「俺のターン、ドロー！」

これはまずい。



いい意味で不味い。

一度ならず二度までも最高責任者が負けてしまってもいいのだろうか？

「どうしたノーネ？」

「あ、いえ、その……」

「どうせ、何をやっても私のアンティーク・ギアを倒すことは出来なイーノですから」

「……………」

あー駄目だこの先生。

完全に俺のこと見下してるよ。

これは不味い。

自分でも沸点抑えられない。

「別に倒す必要なんてない」

「何ですと？」

「俺は手札から『サイクロン』を発動。伏せカードを破壊」

破壊したカードは『聖なるバリアミラーフォース』だった。

これは俺のドロー運がよかったんだな。

サイクロン引いたの今だったし。

「俺は手札から『スカル・コンダクター』の効果を発動。こいつを墓地に送ることによって手札のアンデット族を攻撃力が2000になるように特殊召喚できる。俺は『疫病狼』を二体、攻撃表示で特殊召喚する」

疫病狼 ATK 1000 × 2

「一体どんなモンスターを出すかと思えば、そんな雑魚モンスターの並べたところで、何が出来るルーノですか？」

「……俺は手札から魔法カード『威圧する魔眼』を二枚発動。こいつは攻撃力が2000以下のアンデット族を選択して発動できる。この効果の対象になったモンスターは、相手にダイレクトアタックすることが出来る」

「たとえば、その攻撃をしたところで、私のライフは2000ポイント残ルーノですよ」

その過信が命取りになるんだ。

「疫病狼の効果発動。こいつは元々の攻撃力を二倍にする効果を持っている。つまり、疫病狼の攻撃力は今2000ポイント」

疫病狼 ATK 2000 × 2

「ということとは……」

ようやく気づいたようだな。

「俺は二体の疫病狼でプレイヤーにダイレクトアタック！」

「マンマミーヤ!？」

一瞬、会場が静かになる。

だが、それもつかの間。

歓声が飛び交った。

グッド。

これが俺の望んだ展開。

誰からも見下されない世界。

勝つとはこんなにも素晴らしいものだったか。

「お前、すごいな。あの先生にワンターンキル決めちゃうなんて」

合否は後で連絡されるということで、家へ帰ろうとしたらあの受験生に話しかけられた。

「手札が良かったただけだ」

「でも、すげえよ。今度は俺とデュエルしようぜ」

すごいといわれて悪い気はしない。

「アカデミアに行ったら好きなだけデュエルできるんだから、それまで我慢しろ」

「ちえっ、まあいいや。その代わり、アカデミアに行ったら必ずデュエルしてくれよな」

「ああ、分かった。俺は鳴海遊希」

「お前、遊希って言うのか。俺は遊城十代。同じ『ゆつき』同士仲良くしようぜ」

「ああ、よろしく」

俺と十代は握手を交わした。

「それじゃ、デュエルアカデミアで会おうぜ！」

ぶんぶんと手を振って走っていく十代を見ながら、俺はデュエルアカデミアでの生活に思いをはせた。

## 第一話 入学試験（後書き）

クロノス先生はいつもこんな役回りしかないですが、そのうち活躍の場を作れたらいいなと思ってます。

ライフ4000だとほとんどの攻撃が致命傷になるから困る。

## 第二話 オシリスレッド（前書き）

タイトルと内容が一致しているかどうかは疑問ですが、二話はこのタイトルと決めていたんです。

## 第二話 オシリスレッド

家にデュエルアカデミアの合格通知が来た。

「オシリスレッドか……」

当然と言えば当然。

筆記は良くなかったし。

でも、ワンキルできたから合格つてのも変な話だな。

このカードたちがあれば……。

「何、ニヤニヤしてるんだ？」

顔を上げると、十代が俺のデッキを見て首をかしげていた。

「十代か。いや、ただ決意を新たにしていただけだよ」

「決意？」

「俺がこの学園で、いや、世界で一番のデュエリストになって見せると」

俺の言葉にキョトンとした様子の十代。

ちょっと待て。

俺はものすごく恥ずかしいことを言っただんじやないのか。

「……あ、いや、今は忘れてくれ」

「すげーじゃん！」

「へ？」

「世界一ってことは、あのデュエルキングを越えるってことだろ？  
それってすげーと思う」

「そ、そうかな、ありがとう」

まさか、ここまで言ってくれる人間がいるとは思わなかった。

「だけど、俺も負けないぜ。とりあえず、デュエルしようぜ」

「結局それが言いたかったただけだろ」

「まあな」

呆れたように言っても、まったく態度を変えない十代。

ここに来るまで、俺の周りにはこんな奴はいなかったからな。

「アニキ、あ、鳴海くんも一緒なんだ」

「きみは丸藤翔、だったよね」

「うん。僕のことは翔って呼んでよ。アニキもそう呼んでるし」



「俺のことは遊希でいい」

「遊希くんはもう寮に行った？」

「ああ、一人部屋だった」

「えー僕たち三人部屋だったんだけど……」

「俺は元から一人部屋を希望してたからな。その希望が通ったんだろ」

その割には三段ベッドだったんだけど。

「とりあえず、デュエルしに行こうぜ」

「あ、待ってよ、アニキ」

「十代、走るなって」

デュエルフィールドに着くと、オベリスクブルーの生徒がこちらを見つけた。

「ここはオシリスレッドのドロップアウトが来るところじゃないぞ」

ドロップアウトだと？

「誰かと思ったら、万丈目さん。クロノス教諭に勝った110番と120番ですよ」

イラッとしたが、結構俺と十代は有名らしい。

万丈目とかいうやつは、偉そうに口を開いた。

「偶然とはいえあのクロノス教諭に勝ったんだ。なかなかの腕前だ」

「実力さ」

「俺のは偶然だけだな」

自信満々に答える十代に対し、俺は一応謙遜してみる。

「そこで何をしてるの？」

今度は女性の声がした。

二人の女子生徒が歩いてくるのが見えた。

「天上院くん、藤原くん、この学園の厳しさをこのオシリスレッドのドロップアウトに教えてあげようと思ってね」

「……テメエ、そこまで言うなら俺とデュエルしろ！ それなら、どっちが強いかわ黒つくだろ」

「身の程知らずが、万丈目さんこいつは俺が」

「そろそろ、寮で歓迎会が始まる頃よ」

ツインテールの女子生徒がそういうと、万丈目たちは引き上げていった。

「万丈目くんたちの挑発に乗らないことね。あいつらとんでもない連中なんだから」

「それには私も同意見よ。坊やたち、気をつけることね」

坊やって、一応同じくらいの年だと思っただけど。

「忠告ありがとう。俺たちもそろそろ寮に戻るよ」

「そうしたほうがいいわ」

俺たちはデュエルフィールドから出る。

「そうそう、あんたたちの名前は？」

俺は振り返って二人に尋ねる。

「天上院明日香」

「藤原雪乃よ」

髪の毛の長いほうが天上院で、ツインテールが藤原か。

「俺は鳴海遊希」

「俺、遊城十代」

「丸藤翔です」

「じゃあ、また」

俺たちはレッド寮に向かった。

オシリスレッドの歓迎会は、良く言って質素。

悪く言つと金をかけてない感じがした。

「それでも、学費は払わなくてもいいってのが、この学園のいいところだよな」

流星は天下の海馬コーポレーションが運営している学園だけはある。

荷物を整理して、ベッドに横になる。

オシリスレッドのほうがり心地は良さそうだな。

オベリスクブルーは嫌味な奴が多そうだし、ライイエラーは知らないけど。

机の上で学園からもらった端末、PDAが鳴り始めた。

「何だよ、こんな時間に」

メールを開くと、万丈目の取り巻きが画面に映った。

『ドロップアウトボーイ。午前零時、デュエルフィールドで待って

いる。互いのベストカードを懸けたアンティルールだ。勇気があるなら来るんだな」

「はあ？」

午前零時に寮から出るのって校則違反じゃないのか？

それにアンティルールもだろ。

でもまあ。

「売られたデュエルは買わないとな」

もう昔の俺とは違うんだからな。

自分の口元が歪むのが分かった。

時間に合わせて寮を出ると、十代と翔に鉢合わせした。

「十代も呼ばれたのか？」

「ああ、そういう遊希もか？」

「俺は万丈目の取り巻きにだけどな」

俺たちはデュエルフィールドに向かった。

その途中、翔が弱気なことを言っていたが、十代がデュエルを申

しままれたら断る理由はないと言った。

その通りだな。

デュエルフィールドに着くと、万丈目と取り巻きが待っていた。

「逃げずに来たか。その気概だけは認めてやろう。だが、所詮オシリスレッドがオベリスクブルーに勝つことなどできないだろうがな」

「ごちゃごちゃ言っていないで、デュエルディスクを構えろ」

「万丈目さん。こいつは俺が」

「ああ、任せる」

十代が万丈目と、俺はその取り巻きとデュエルすることになった。

「格の違いを教えてやろう」

「勝手に言ってる」

「「デュエル！」」

遊希LP4000

取り巻き1LP4000

「俺の先攻。ドロー！」

先攻なら、相手の場を乱すことも容易い。

「俺は『手札抹殺』を発動する。お互いのプレイヤーは手札を全て捨て、同じ枚数になるようにドロウする。俺は五枚捨て、五枚ドロウ」

「よっぽど手札が悪かったみたいだな」

馬鹿だな、こいつは。

手札抹殺がただの手札交換なわけないだろうに。

「俺は『ゴブリンゾンビ』を守備表示で召喚」

ゴブリンゾンビDEF1050

「ふはははは、そんな雑魚モンスターを出すことしか出来ないか」

調子に乗りすぎだろ。

「俺はカードを二枚伏せて、ターンエンド」

遊希LP4000

ゴブリンゾンビDEF1050

魔法・罠カード

伏せ二枚

十代のほうは、フレイムウィングマンを万丈目に取られてる。

ここは俺が決めないとな。

「俺のターン。俺は手札から『切り込み隊長』を召喚。切り込み隊

長の効果で、さらに切り込み隊長を特殊召喚する」

「じゃあ『激流葬』で全部流れてくれ」

「何！？　だが、お前もモンスターを破壊している」

だから、なんでこう安易な発想しか出来ないかね。

「ゴブリンゾンビは、フィールドから墓地に送られたとき、手札に守備力1200以下のモンスターを手札に加えることが出来る。俺が加えるのはこいつ『ゾンビマスター』」

「くっ、カードを二枚伏せてターンを終了する」

取り巻き1LP4000

魔法・罠カード

伏せ二枚

通常召喚を行ったし、特殊召喚できるモンスターもいないみたいだな。

伏せカードは攻撃反応型か、召喚反応型か。

どちらにせよやることは変わらないが。

「俺のターン、ドロー！」

「騒がしいと思って来てみれば、一体何事かしら？」

「藤原さん……」



取り巻き1が気持ちの悪い笑みを浮かべて、やってきた藤原を見る。

やれやれ、今はデュエルに集中しろよな。

「念のため、俺はトラップカード『トラップスタン』を発動する。このターン、トラップの効果は無効になる」

「何だと!？」

「そして、俺は手札から永続魔法『ミイラの呼び声』を発動。このカードはターンに一度、自分フィールド上にモンスターがいないときに効果を発動できる。手札から、アンデット族モンスターを特殊召喚できる。俺が呼び出すのはさっき手札に加えたゾンビマスター」

ゾンビマスター ATK1800

「俺はゾンビマスターの効果を発動。手札のモンスターカードを一枚捨てることで、墓地のアンデット族モンスターを特殊召喚できる。俺はもう一体のゾンビマスターを特殊召喚」

これでゾンビマスターが二体並んだ。

だが、これだけじゃないんだ。

「今特殊召喚したゾンビマスターの効果発動。モンスターカードを墓地に送ることで、三体目のゾンビマスターを特殊召喚」

ゾンビマスター ATK1800×3

「そして、この三体のゾンビマスターでプレイヤーをダイレクトアタック!」

「う、うわぁあああ!?!」

三体のゾンビマスターが取り巻き1に襲い掛かる。

これはトラウマモノだな。

だが、グッド。

「もう、俺たちを見下すのはやめろよ」

「う、嘘だ。エリートであるはずのこの俺が負けるなんて……」

「は?」

「そつだ、偶然だ。偶然勝ったくらいでいい気になるなよ」

「はぁ……」

こんな奴らばかりなのか、オベリスクブルーは。

っと、十代のほうもそろそろ終わりが近いのか。

「俺の引きは奇跡を呼ぶぜ。ドロ―!」

「警備員が来るわ。校則違反で退学になるかも」

水を差された十代は、その場から動かないとか言っていたが、俺と翔で無理やりその場から連れ出した。

「ちえ、余計なことしてくれちゃって」

「そう言うな、十代。退学にはなりたくないだろ？」

「そうだな」

「それでどう？ オベリスクブルーの洗礼を受けた感想は？」

「まあまあかな。もう少しやるかと思ってたけど」

「確かに。口先だけで、相手の場を警戒しないプレイングばかりだし」

「あなたは良かったかもしれないけど、そっちはアンティルールで大事なカードを取られたかもしれないわよ」

天上院が十代に向かって言う。

「いや、今のデュエル、俺の勝ちだぜ」

そう言って、十代が見せてきたのは『死者蘇生』だった。

十代、フレイムウィングマンは融合召喚でしか召喚できないぞ。

というのは無粋なので言うのはやめた。

「坊や」

「俺か？」

藤原が俺に話しかけてきた。

「あなた強いのね」

「そりやそうだぜ。遊希は世界一のデュエリストになるんだもんな」

「十代！？」

人前でそんなこと言うなよ。

ほら、呆れたように俺のこと見てるし。

「世界一、ねえ……。面白いわね。応援してるわよ、坊や」

藤原は俺の肩を叩いて、その場から歩いていった。

「珍しい、雪乃が男を認めるなんて」

「そうなのか？」

「ええ、彼女、他人を寄せ付けないから」

「ふーん」

俺は藤原の背を見送った。

天上院もそのあとを追うように走っていった。

俺たち男三人組は、デュエル談義をしながら寮に戻った。

寮に帰ったのは、明け方くらいだったけど。

## 第二話 オシリスレッド（後書き）

一話のあとがきでも書きましたが、ライフ40000はきつい。いろんな意味で。

この主人公の性格とか過去が安定しない。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4899ba/>

---

遊戯王GX～亡霊を従えし者～

2012年1月13日16時57分発行